

附録 1

原文：

海岸のような荒野のようなところである。

私は女に手を引かれて歩いている。

今日はお祭りなのだ。遠くでどん、どん、と太鼓の音がする。

私はこんな齢になってもまだ手を引かれて歩いているのがとても気恥ずかしい。

でも、私は子供なのだからこれがいいのだ。

海岸には黒衣の、徳の高そうな僧侶が何人も立っていて、手に錫杖を持って、じゃらじゃら、と鳴らす。私はそれが面白くて、ついつい見てしまう。しかし女は私の腕をぐいと引っ張って、無理矢理夜店の方に私を引き寄せ、「ほうら、綺麗でしょう」

などという。

私がそれでも僧侶を見ようとすると、女はとても嫌な顔をする。

私は女に謝らなければならないと思った。しかし、何と呼んでいいのか思い出せない。

この女は私の母なのだから普段から何度も呼んでいるだろう。

女は口籠っているのが気に入らないので、折檻をするという。

私はそれも仕方がない、と思った。

女は私の頭を掴むと、砂浜にぐい、と押し付けて鬼のような声で何かいっている。

しかし砂が耳に入って来て能く聞こえない。

どうして耳は閉じることができないのだろう、私はそう思った。

耳からどんどん砂が入って来て、私の頭は物凄く重くなっている。

頸を曲げると、女の着衣の裾が捲かれて、白い脛が見えた。

私はそれを見てはいけないと思う。

反対側に頸を曲げようとするが、ぐいぐい押されているのでどうしても頸は曲がらない。

僧侶達は錫杖の先に大きな魚を突き刺してそれを高く掲げて喜ぶ始めた。

でも、あれは魚なんかじゃないぞ。

僧侶の一人が

「こんなこともある」

といった。突き刺さっているのは人間の嬰兒なのだ。

私がそれを見ていたのが気に入らないらしく、女は不機嫌な顔で夜店の中にどんどん入っていった。中は砂漠のようになっていて、下品な色の布、阿弗利加の蛙なんかを売っているのだ。

私は女を呼び止めたいのだが、どうしても呼び方を思い出せない。

一人になるのは心細かった。

私はまだほんの子供なのだ。
女は私が口籠っているのが気に入らないので、折檻をするという。
女は私の頭を掴むと、砂浜にぐい、と押し付けた。
砂はとても熱くて、おまけに砂の中には座頭虫が沢山混じっているの、私は随分不快な気持ちになった。
座頭虫は何百疋と私に取り付き、背といわず腹といわずちくちくと歩き回った。
耳に座頭虫が入っては大変なことになってしまう。
私は痛いのを堪えて、頭を上げた。女の力は強くて、私は大層難儀をしたが、上げた顔の目前に女のはだけた襟元があったので、私は愈々困ってしまう。
襟元からは女の白い乳房が覗けていて、私はそれを見てはいけないと思うのだが、目を瞑ることもできなかった。
私は仕方がないので、茶の間の方に行こうと思い、女の手を擦り抜けた。
砂浜を二三步、躊躇と歩いた。
襖を開けると、妻が新聞を読んでいた。
妻が怪訝な顔で私を見る。それもまた已むを得ないと思う。何しろ私は母に折檻をされるような子供なのだから。
私は、座頭虫が座布団についたりしては大変なので、ばたばたと体を叩き虫を払う。耳の中の砂はこぼれないので大丈夫だろう。妻は、眉間に皺を寄せて私を見た。
「どうしたの？寝ぼけてでもいるのですか？」
「いや、そんなことはないよ。どうにも頸が痛くてかなわない」
「寝違えたのでしょうか。昨晚も魘されて布団から随分はみ出して寝ていたもの」
そうして妻は私の顔をまじまじと見た。
私は顔に座頭虫がついているのかと思い、そう思うと何やらちくちくとするので、急に気持ちが悪くなって顔を手で払った。
「何です、顔中に畳の跡がいっぱいついている。それじゃあ見ているこっちが痒くなってしまおうー」
妻はそんなことを言う。では座頭虫はいないのだろうか？
だいたい何で座頭虫がいるのだろうか？
私は急にそんなものはいないのだという気がした。いる訳がない。
出自『文庫版 姑獲鳥の夏』、株式会社 講談社、1998年、p.178

附録 2

原文：

多重構造の建物の中を逃げ惑っている。

追われているのだ。振り返ると仲間が次々と殺されていくのを見ることができる。私は息を止めて身を屈め、死んだ振りをしてそっとそれを見る。しかしはっきりとは見えない。両目が濁っているせいかな。いや、周りが暗いのだ。真っ暗だ。

比較的都会で育った私は未だかつてこれ程の闇を経験したことがない。

異郷の夜には電灯はおろか松明の灯りさえなかった。

藪蚊がいる。いや、蚊ではない。

得体の知れない昆虫だ。油断をすると皮膚の下に卵を産みつけられてしまう。小隊は全滅した。部下は一人を除いて皆死んでしまった。私の責任なのだろう。

あの気味の悪い声は何だ？鳥だろうか。

—ジャングルの鳥は夜でも啼くのだ。

男がいった。真っ暗で顔など解らない。明るくなるまでじっとしていよう。右も左も解らないし、もし墓場などに足を踏み入れると大変なことになってしまう。

—朝までいたらボーイに見つかる。捕虜になって辱めを受けたいか。

—それともいっそ自決するか？他の部隊の隊長なら皆そうする。

—それが玉砕というものだ。

甲高い声で男がいう。死ぬのは嫌だ。

急に怖くなった。日頃からあれ程生きることを厭い、この雑駁とした日常から逃避することだけを願い、つまりは死にたいばかり考え続けていたというこの私が。

あんたは取り返しのつかないことをしてしまった—。

もう後には戻れないんだ。だから先へ進むしかない—。

甲高い声が告げる。この、生き残った部下の名前はなんといっただろう？

取り返しのつかないこと

折れそうな程細い腰。蠟細工のような白い肌はひんやりと冷たい。

そして赤い、赤い鮮血。

私は壊したかった。

簡単に壊れる癖に、一度壊してしまったら二度と元には戻らない何かを。

急がなければ。こんなところにはいられない。臆病な私は逃げなければならぬ。

どこへ？あそこだ。あの四角い明かりは神社の鳥居なのだ。しかしそこへ行くには、墓場を通り抜けなければいけないじゃないか。

—何をしている？

体が思うように動かない。足が縛れる。闇が纏わりついて来る。これ程の闇夜は経験したことがない。いや、違う。あの日もそうだった。あの、夏の夜。
出自『文庫版 姑獲鳥の夏』, 株式会社 講談社, 1998年, p. 458

